広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「うそ」に対する反応とその成長 : 笑い話を実験資料として
Author(s)	飯住, 良夫
Citation	児童の言語生態研究 , 5 : 15 - 26
Issue Date	1972-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045055
Right	
Relation	

本会共同調査と研究報告(2)

「うそ」に対する反応とその成長

—笑い話を実験資料として—

（原稿整理担当）　飯住良夫

私たちは、子どもの頃、大人たちが使う言葉が理解できずにとまどったことを、しばしば経験したのを憶えている。その言葉に対して、とまどいの中にも大へんな新鮮さを感じたことも憶えている。どういうことなのだろう…などと、首をかしげ、あれこれ詮索しやっと、その意味をつかんだ時の喜びや、とうとう、その言葉を自分のものにしたぞ、その言葉を乗り越えたぞという自信と自分の広がりを感じたことも、現在でも、なお、思い出すことができる。

このような経験を、「笑い話」との出会いにおいても持ったことであろう。「笑い話」のオチがわからずに、笑うに笑えない経験は、誰しも持つところである。

「笑い話」とは、何か、「オチ」とは、人間にとって何なのかなどと問うのも、何か笑いを呼びそうであるが、どうしても、そこには、捨て切れないものがある。

「笑い話」を聞いて、笑えないということは、その「笑い話」の持つ構造の間隙（からくり）を、感知できないということであろう。

こう考えてみると、私たちは、「笑い話」について、言葉のはたらきと、そこに動く人間の思考や感情との密接な結びつきがあることを見つけざるを得ないであろう。

「笑い話」は、人間が、ある日、どこかで、言葉を駆使し、「ことばによるからくり」を作り出したものと考えれば、その「からくり」の様子が、人間の持つ思考の型や感情の状況やらを示しているものと考えられる。

「からくり」の構造を、我が物とすることによって、初めて、「笑い」が生まれるのである。

そこで、今回は、子どもたちは、いったいに、「ことばによるからくり」の構造を、どこで、どのように身につけるのか、また、その構造をつかむということは、子どもにとって、どういうことなのかを知りたく思い、この調査を始めたわけである。

一、調査に使った笑い話とテスト形式

1　つぎの□の中に、大きな　小さな　のことばをいれなさい。

だんなが、こぞうさんをつれて、お客にきました。

ざしきにとうされたとき、こぞうさんが、とつぜん

「だんなさあ。」と

だんなさまのえりもとに、手をやって、□声で

「こんなところに、しらみがおります。」

だんなは、はらをたてて

「そんなことは、□声で言うもんじゃ。このあほうめ。」

すると、こぞうさんは、

「いいえ、だんなさま。」と

□声で言いました。

「よく見たら、しらみじゃなくて、わたくずでした。」

（正答　大きな、小さな、小さな）

2　つぎの□の中に、ことばをいれなさい。

店へやってきた、ふたりづれのお客さん。さっそく、ひとりが、きせるをとりあげました。

ところが、のもうとすると、つまっていて、すえません。

「どれ、ちょっと、かしてみな。」

もうひとりのお客がいいました。

すると、はじめのお客は、

「いや、わしがする。」と

言って、また、あれこれやってみますが、きせるは、とうりません。

あいての客は、はらをたてて、

「えい、はやくよこせ。」と

ひったくろうとします。

「いやだ。」

あいては、わたそうとしません。

ふたりのようすを見ていた家のあるじが、おくへ声をかけました。

「これだれか。あっちの客にも［　　］をもってきてあげな。［　　］をもってきてあげな。」

（正答　つまったきせる　〃　）

3　つぎの話を読んで、（一人、二人、三人）をえらんだり、［　　］の中に、ことばをいれなさい。

むかし、ある山寺で、三人のぼうさんが、むごんの行をしました。むごんの行というのは、どんな場合にも、けっして、ものを言ってはならないのです。

三人のぼうさんは、一つのへやに、ならんですわって、むごんの行を始めました。

夕方ちかく、寺の小ぞうが、ともしびをともして、へやのまん中においていきました。

だんだん、夜がふけていきます。そのうちに、油がきれてきたらしく、へやの中がすうっと暗くなりかけました。

あかりのそばから、一人めのぼうさんが、

「おい、早くきてくれ。あかりが消えそうだ。」

それを聞いて、となりのぼうさんが、

「これこれ、むごんの行の最中にものを言う人がありますか。」

と、たしなめました。

すると、（一人・二人・三人）めのぼうさんが、こう言いました。

「［　　］」

（正答　三人め・ものを言わずにいるのはわしひとりじゃ。）

4

ある病人が、医者のところにやってきました。

「先生。どうも、朝おきてから、いつも、三十分、おなかがいたくてしょうがないんです。」

お医者さんは、こういいました。

「それじゃ。毎朝、三十分、おそくおきなさい。」

問　あなたは、この話を読んで、もし病人の立場だったら、お医者さんのことを、どう思いますか。

5　笑い話「大山君と小川君」

大山君は、とてもよく勉強ができます。

小川君は、あまり勉強ができません。

先生が、大山君に質問しました。

大山君は、答えました。

先生は、

「よろしい」といいました。

つづいて、小川君に、同じ質問をしました。

小川君は答えました。

「大山君の言ったとうりです。」

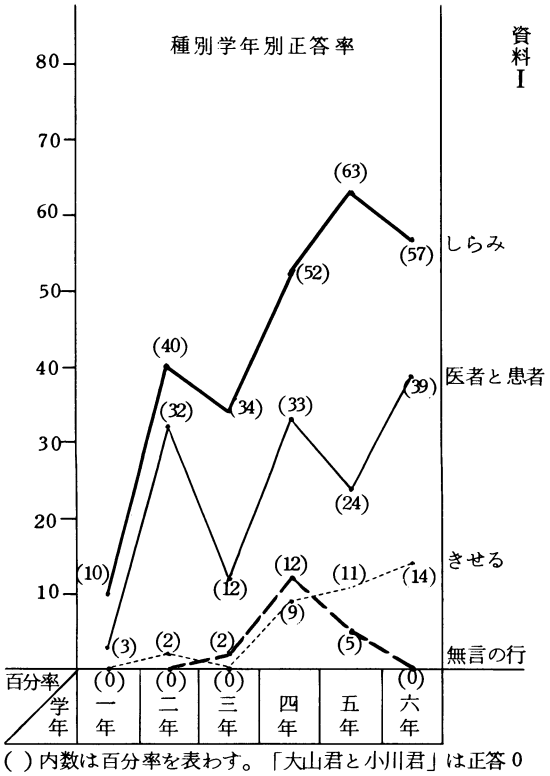
「言ったとうりでは、わからない。言いなおしなさい。」

「言いなおしたら、まちがいます。」

問　小川君は、言いなおしたら、なぜまちがうのでしょう。あなたの考えを書いてください。

二、資料編

資料Ⅰ



（ ）内数は百分率を表わす。「大山君と小川君」は正答０

資料Ⅱの1

○印→正答　△印→正答に近いもの　×印→誤答　無印→無解答・不明

※代表例は典型例を示した。

タイプ	一年生（東京都港区立港南小）31名						タイプ人数	具体事例（代表例）				
	しらみ	きせる	無言の行	医者と患者	笑い話			しらみ	きせる	無言の行	医者と患者	笑い話
A 13	○	△	○				1	大小小	きせる　きせる	ろうそくが消えそうだ	うれしい	無
A 21	○	△					1	〃	〃	あかりがきえそうだ	ためしてみる	わすれるから
A 28	○						1	〃	みずをもってこい〃	〃	〃	〃
B 12		△	○		△		4	大小大	きせる　きせる	こらむごんの行中に話してはだめ	すぐおきればいい	ちがうことを言うとまちがう
B 16		△	○				3	小小大	〃	3人め	30分早く起きなさい	わからない
B 21		△					2	大小大	〃	またつければいいでしょう	ほんとうだと思う	ちがうこたえだったから
C 2			○		△		9	小大大	おちゃ　きもの	こらむごんの行中話してはだめ	あたまがわるい	べんきょうができないから
C 3			○	○			1	小大小	？をやれ〃	人りのぼさひかえとゆた	30分おそくおきても同じ	じぶんでできないから
C 5			○				6	大小大	とるもの〃	おい早くきてくれといいました	どうもありがとう	あたまがわるい
F	無	無	無	無	無		3	無	無	無	無	無
正答人数	3	0	24	0	1	0						

三、調査の結果について

資料の作成にあたっては、資料Ⅱについては、各事例を、各問題別に、正答・誤答を、順列組み合わせ式に、分類したものである。

資料Ⅲについては、資料Ⅱにでた各類を、学年別、類別の人数を見たくて作成したものである。

さて、こうやって、資料編を作成してみると、いくつかの特徴が見つけ出される。

資料Ⅲについて見てみると、人数のかたまりのある所、あるいは、空白の部分とがあることがわかる。このあたりに、この調査の問題が含まれていそうである。かたまりは、類の出現を表わしているのであるから、ここに含まれている問題は、設問の難易、及び、各学年の階梯を追ったものになりそうである。

以下、こういう視点を持ちながら、それぞれの特徴について考えていくことにする。

特徴1

A類に属するものの内、特にA1～A10までの部分である。

A2～A7までは、四年あるいは六年から、初めて出ているのに反し、A8～A10までは、二年～六年までに出ている。

本調査の事例中、五問中四問正答はA1であり、その返答が、

「大小小。」

「つまっているきせる、　　。」

「わたしだけでやりましょう。」

「三十分おそく起きても同じ。」

「他の答を言えと言われたと聞こえたから。」

となっているのに比し、A2～A7までは、それぞれ、A2は、「医者と患者」、A3は、「無言の行」、A4、A5、A6、A7は、その両方に、誤答あるいはそれに近い返答（以下○印△印×印と記す）があるが、ここで、注目したいことは、×、△が、「無言の行」と「医者と患者」に集中していることである。ここに入る子どもたちは、この二問のために、A1類に入れないわけである。このことから、この段階の子どもにとって、これら二つの話が一つの壁になっているものと考え

資料Ⅱの2

タイプ	二年生（私立玉川学園小学部）35名 しらみ	きせる	無言の行	医者と患者	笑い話	タイプ人数	具体事例（代表例） しらみ	きせる	無言の行	医者と患者	笑い話
A8	○	△	○	○		2	大小小	きせる　きせる	行の最中にものを言うやつがあるか	30分おそく起きても同じ	無
A9	○	△	○	△		2	〃	〃	〃	ずるいなあ	あたまがわるい
A10	○	△	○	△		1	〃	〃	しゃべっちゃだめ	いうことをきく	いまのがあっていたから
A12	○	△	○	△		3	〃	〃	無	ずるいと思う	まねしたから
A14	○	△		△		2	〃	〃	ものを言う人がありますか	30分おそくおきても同じ	無
A15	○	△		△		1	〃	〃	しゃべっちゃだめ	あたまがくるっている	まねすると人の名前いうから
A18	○	△		○		1	〃	〃	無	〃	まねができないから
A20	○	△		△		2	〃	〃	早く来てくれあかりが消える	ばかだと思う	わからなかったから
B4		○		○		1	〃	つまったきせる 〃	だってあかりがきえちゃうもの	30分おそくおきても同じ	いいなおしたらまちがえる
B10		△	△	○		2	大大小	きせる　きせる	おまえもしゃべった	あとになっておなかがいたくなる	大山君の意見をしらないから
B11		△	△	○		6	大小大	〃	なぜしゃべっている。いけないよ	ばかだと思う	あたまがわるい
B14		△		○		3	小大大	〃	無	30分おそくおきても同じ	べんきょうができない
B15		△		△		3	小大大	〃	おい　早くきてくれ	ばかだと思う	べんきょうができないから
B16		△		○		2	大無無	〃	無	無	無
B18		△	△	△		1	大無小	〃	ものを言う人がありますか	30分おそくおきない	わからなくなるから
B19		△		△		1	小小大	〃	おほうさんがブーをしたぞ	バカなやつ	〃
B21		△				1	大大小	〃	あかりが消えそうだ	30分おそくおきる	わからなくなったから
C1		○	△	○		1	大小大	きせる	しゃべっちゃいけない	それは同じだと思う	ちがう答をいったらまちがえる
正答人数	14	1		26	0	12	0				

られる。（資料Ⅰ参照　―　正答が低い。特に「無言の行」）

このことは、他の特徴とも関連があると考えられるので後述する。

また、A2～A7とA8～A10を比較してみると、A8～A10についてはA2～A7より「きせる」ができていなく、一つの壁になっていると言える。A8～A10の子どもは、ここで、「きせる」を克服しなければならないわけであるが、その返答をひろってみると、

A8「はやく、きせる」
A9「きせる、きせる」
A10「きせる、きせる」

となっている。

この「きせる」の話についての事例中、「きせる、きせる」という事例が大へん多数あった。

「きせる、きせる」という返答でもこの話が、笑い話にならないでもないが、「つまったきせる。つまったきせる。」とするのとでは、やはり、笑い話としての構成からすると、ちがいがでてくる。

つまり、この「きせる」の話は、笑いを呼び起こす核心を、きせるの穴においていると考えられるからである。きせるの穴に対する主人の意識のあり

様が核心となっているのであり、また読む方にとっても、このきせるの穴そのものの効用ということについての意識を持ち合わせているかどうかによって、この話が、笑い話になるか、ならないかが決ってくるのである。

二人の客が争いをしている。その原因が、きせるの穴を通し抜くことにある。二人の客からすると、きせるの穴を通して、早く、きせるをきせるとして使う、つまり、きせるの穴そのものの本来の機能をとりもどさせたいということにあることが、主人の眼には、きせるのとりあいであると見えてしまっているのである。

この争いの唯一の解決は、きせるの「穴」があくことであり、そこへ、穴のあいたきせるを持ってくることである。

こう考えてみると、「きせる、きせる」とするのと、「つまったきせる、つまったきせる」とするのとでは、笑い話としての構成がちがってくることが自明のこととなろう。

A8〜A10の子どもたちにとっては、まさしく、「穴」が「穴」であったわけである。「欠如」に対する意識の志向に、「穴」があったわけである。

この「きせる」についての正答は、四年から出ているが、全体としては、大へん低い正答率を示している。（資料Ⅰ参照）

低い原因が、先述のようなことを、読みとれなかったことにあると考えられるが、このことからすると、ことばの認識にかかわるところにおける、「不在」への志向が、子どもたちにとっては、たいへんな壁になっていると言えよう。イソップ童話に例もあるが「不在」そのものへは気づきはするの

資料Ⅱの3

タイプ	三年生（横浜市立三ツ沢小）41名 しらみ	きせる	無言の行	医者と患者	笑い話	人数	具体事例（代表例） しらみ	きせる	無言の行	医者と患者	笑い話	正答人数
A8	○	△	○	○		2	大小小	きせる きせる	何もいってはいけないよ	30分おそくおきても同じ	わすれちゃうから	
A10	○	△	○	△		5	〃	〃	〃	へんなお医者さん	わからないから	
A21	○	△				6	〃	〃	ろうそくが消えそうだ	心のやさしいおいしゃさん	ほかの答がわからない	
A25	○		○	△		1		ぼうとしていました		へんないしゃだと思う	聞いていないから	
B10		△	○	○	△	1	大小大	きせる きせる	だめだものをいっちゃ	30分おそくおきても同じ	勉強ができないから	
B9		△	○	△	○	1	〃	〃	しょうぶはわしのかちじゃ	バカないしゃ	〃	
B11		△	○	△	△	5	〃	〃	きみもしゃべっちゃこまる	むせきにんないしゃ	おぼえていない	
B16		△	○			3	大小小	きせる をい	油をむってよう	いしゃをしんじる	へんじをする	
B19		△		△		7	大小大	きせる きせる	油がきれたんではしょうがない	やぶいしゃ	わすれたから	
C2					△	3	大大小	きせる たばこ	自分もしゃべったじゃないか	こんなこういいしゃははじめてだ	勉強ができないから	
C3			○	○		1	小大大	〃	油があるからしずかにしろ	30分おそくおきてもなおらない	聞いていなかった	
C7				○	△	1	小大小	きせる 無	ものをいう人がありますか	〃	言ったとしたらまちがいます	
B20				○		2	〃	きせる きせる	もうこわいよう	30分おきてもいたい	聞いていない	
D1					?	1					こたえは一つしかありません	
F						2	無	無	無	無	無	

資料Ⅱの4

タイプ	四年生（私立玉川学園小学部）33名 しらみ	きせる	無言の行	医者と患者	笑い話	タイプ人数	具体事例（代表例） しらみ	きせる	無言の行	医者と患者	笑い話	正答人数
A2	○	○	○	○		1	大小小	つまったきせる〃	わしの勝じゃな	考えすぎ	あまりよく聞いていなかった	
A3	○	○	○	○		1	〃	同じ物 同じ物	話してはだめ	30分おそくおきてもなおらない		
A4	○	○	○	○		1	〃	〃	無言の行の最中ですぞ	やぶ医者	〃	
A5	○	○	○	○	△	1	〃	同じきせる〃	あかりがきえそうだからどうにもならない	親切な医者	聞いていなかった	
A8	○	△	○	○	○	4	〃	はやくきせる	二人ともだめだな	30分おそくおきてもなおらない	いいなおすとまちがえる	
A9	○	△	○	○	△	4	〃	きせる〃	しゃべってしまった	おかしな医者だ	まちがえるから	
A10	○	△	○	○	△	2	〃	〃	ものを言ったじゃないか	かんたんな医者だ	ちがう答ではない	
A12	○	△	○		△	1	〃	〃	声があるからしょうがない	へんな医者	そっくりそのままいえないから	
A18	○	△		○	○	1	〃	〃	そんなこといったってしょうがない	うそをついているみたい	大山君がよろしいといわれたから	
A23	○		○	○	△	1	〃	きせる 無	ものを言う人がありますか	30分おそくおきても関係ない	まちがえる	
B1	○	○	○	○	○	1	大大小	きせる わざとつまらせた	私はしゃべってないぞ	〃	勉強ができないことになるから	
B8	△	△	○	○	○	1	〃	きせる〃	えへんのこったのは私一人	とんちな医者だ	おぼえていない	
B9	△	△	○	○	△	1	大小大	〃	勝った勝った私の勝ちだ	へんな医者だ	ちがうしつもんだから	
B11	△	△	○	○	△	4	無小大	〃	話をしちゃだめじゃないか	しんさつすればいいのに	聞いていなかった	
B12	△	△	△	○	△	2	小大大	〃	最後はみんな話してしまった	よい医者	同じ答はいけないから	
B15	△	△	○	○	△	1	大小大	〃	もう消えそうだ小憎どうした	しんさつすればいいのに	あたまがわるい	
C4	○		○	○	△	2	大小大	きせる 無	無	三十分おそくおきていたかったら文句いう	無	
C5				○		2	〃	〃	自分でつければいいではないか	おなかをなおしてください	わすれてしまう	
D2					△	2	無	二番目のぼうさんがほんとといった	なんだこんな医者来るのやめよう	まちがえるから		

であるが、「不在」を、ずれとして扱うには、まだ、ほど遠いところに子どもたちはいると言えよう。

特徴2

A12～A15の間に、三・四・五年の所に、一つの空白ができている。この空白は、何を語っているのであろうか。

それぞれに、共通していることを、資料Ⅱから抽出してみると、「無言の行」の誤答があるということになろう。

「三人目」とおさえていても、せりふが、うまく入っていなかったり、「三人目」が、おさえられなかったり

A10　三年生

しているわけである。

この点に注目しながら、三・四・五年のそれぞれの上・下の類の事例を見てみると、

A21　四年生

（三）「何も言ってはいけないよ。」

（×）「ものを言う人がありますか。」

A10

（三）「ものを言ったじゃないか。」　（三）「行中にさわぐ人がありますか。」　また、A12～A15がでている一・二・六年を、それぞれに見てみると

※下の類の人数のかたまりはない。　A20　（無）「無」　一年　A13　（三）「ろうそくが消えそうだ。」　二年　A12　（三）「無」　A14　（無）「ものを言う人がありますか。」

五年生　A10　資料Ⅱの5　となっている。

タイプ	五年生（横浜市芹が谷小）38名						タイプ人数	具体事例（代表例）				
	しらみ	きせる	の無言の行	医者と患者	笑い話			しらみ	きせる	無言の行	医者と患者	笑い話
A1	○	○	○	○			1	大小小	つまっているきせる〃	わたしだけでやりましょう	30分おそく起きたって同じ	他の答を言えといわれたと聞こえた
A3	○	○	○	○			1	〃	〃	2人ともしゃべったではありませんか	〃	わからないから
A8	○	△	○	○			1	〃	きせる　きせる	お前さんたちしゃべったね	〃	〃
A9	○	△	○	△			2	〃	〃	行中にさわぐ人がありますか	へんだ	聞いていなかった
A10	○	△	○	△			2	〃	〃	〃	なるほどと思う	〃
A18	○	△		○			1	〃	〃	3人め	30分おそく起きても同じ	ことばをまちがえる
A19	○	○					2	〃	つまっているきせる	〃	くすりをくれればいい	もう一度言おうとするとまちがえる
A20	○	△					8	〃	きせる　きせる	3人めまたはなし　不明	へんだ　やぶ　まぬけ　いじわる	よくわからないから
A22	○		○				1	〃	いいきせる	わたしだけが行ができましたな	〃	〃
A23	○		○	○			1	〃	きせる　無	あまりさわいだらいかん	30分おそく起きても同じ	聞いていなかった
A26	○		○				1	〃	〃	無	いしゃのいうことは正しい	〃
A27	○			△			2	〃	〃	大事なことだから	ばかげている	〃
A28	○						2	〃	〃	無	よくなるからいうことを聞く	無
B10		△	△	○			2	大大小	きせる　きせる	行の最中にものを言う人がありますか	30分おそく起きても同じ	べんきょうができないから
B14	△	△	○	○			1	〃	〃	行をもうやめよう	〃	聞いていなかった
B12	△	△	○	△			2		〃	行の最中にものを言う人がありますか	バカな医者　やぶ医者	〃
B13	△	△	○	△			1		〃	2人ともしずかに	へんなことを言う医者	もう一度言おうとするとまちがう
B20		△		○			1	小大小	〃	無	30分おそくおきても同じ	しかられるから
B19		△		△			2	〃	〃	〃	むせきにん	聞いていなかった
B21		△					2	〃	〃	無	ねるなんてかわった医者	言ったら「ちがう」と先生に言われる
F							2	無	無	無	無	無
正答人数	22	4	16	2	9	0						

人数	正答	F	C6	C1	B21	B17	B14	B12	B10	B7	B6	B5	B3	B2	A28	A26	A24	A23	A21	A18	A17	A16	A14	A12	A10	A11	A9	A8	A7	A6	A4	A3	タイプ	六年生（横浜市立芹が谷小）77名
																																	しらみ	
46		無													○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
15		無			△	△	△	△	△	○	○	○	○	○					△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	○	○	○	きせる	
47		無		○			○	○	○				○	○		○	○	○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	の無言	
0		無	△	△		△		△	△			△	△	△			△	△			△	△	△		△		△	△	△		△	△	行	
28		無		○		○	○		○		△	○		○				○		○			○	△		○	△	○	△	△	△	○	医者と患者	
0		無																				△							△				笑い話	
		5	1	1	6	1	4	3	1	2	1	3	2	2	1	1	4	1	7	2	2	2	3	2	1	2	7	5	1	1	2	2	タイプ人数	
		無	大小大	大大小	大小大	大大小	大小大	大小大	大大小	小大小	〃	〃	〃	大小大	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	大小小	しらみ	具体事例（代表例）
		無	おちゃ おちゃ	きせる たばこ	〃	〃	〃	〃	きせる きせる	〃	〃	〃	〃	きせる つまっているの	〃	〃	きせる 通るきせる	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	きせる きせる	〃	〃	つまったきせる 〃	きせる	
		無	だまっていなさい	うるさいぞ	あかりをつけろ	二人目のぼうさんが	ぜったい話かけるなよ	みんなしゃべった	あなたたものを言った	〃	だけど火が消えてしまう	〃	きみもものをいった	そのとおりじゃ	どうもすみません	まずだまっていましょう	行の最中に話すな	〃	油がきれる	もうやめだ	そういうあなたもしゃべった	もうよそう	しゃべっちゃだめ	油がきれそうだ	おい何をやっている	ナシ	〃	行の最中に話してはならない	そういう場合はしょうがない	〃	行の最中にものを言う人がありますか	無言の行	
		無	学校におくれる	30分おそくおきてもかわりない	くすりをくれればいい	30分おそくおきても同じ	見てやればいいのに	けちんぼ	30分おそく起きても同じ	おなかがいたくてねむれるかな	むせきにん	30分おそくおきても同じ	会社におくれる	何分おそくともおきるからだめ	勝手だ	なまけている	くすりでもくれ	30分おそくおきても同じ	一応やってみる	30分おそくおきても同じ	〃	むせきにん	30分おそくおきても同じ	むせきにんな医者	30分おそくおきても同じ	ちこくしてしまいます	やぶ医者	30分おそくおきてもおなかはいたむ	これでも医者か	いいかげんな医者だ	すじの通った説明をしてほしい	30分おそく起きても同じ	医者と患者	
		無	聞かなかった	わからないから	聞いていなかった	ちがってしまう	わからなかった	まちがえる	大山君の言ったことを自分の意見としたかったから	わすれた	〃	聞いていなかった	まちがった答をいう	聞いていなかった	もう一度いうとまちがう	くやしいから	まちがえる	わすれた	〃	聞いていない	はんたいにいった	言ったとおりには言えない		おぼえていない	先生にちがうといわれる	いいなおしたらまちがう	聞いてなかった	わすれるから	全く同じに言わなければならないから	まねをしたといわれる	よくわからないから	ちがうことを言った 忘れた	笑い話	

資料Ⅲの1

A	1年	2年	3年	4年	5年	6年	人数
1					•		1
2				•			1
3				•	•	••	4
4				•		••	3
5				•			1
6						•	1
7						•	1
8		••	••	⁝⁝	•	⁝⁝⁝	14
9		••		⁝⁝	••	⁝⁝⁝⁝	15
10		•	⁝⁝⁝	••	••	•	11
11						••	2
12		•••		•		••	6
13	•						1
14		•••				•••	6
15		•					1
16						••	2
17						••	2
18		•		•	•	••	5
19					••		2
20		••			⁝⁝⁝⁝		10
21	•		⁝⁝⁝			⁝⁝⁝⁝	14
22					•		1
23				•	•	•	3
24						⁝⁝	4
25			•				1
26					•	•	2
27					••		2
28	•				••	•	4

資料Ⅲの2

B	1年	2年	3年	4年	5年	6年	人数
1				•			1
2						••	2
3						••	2
4		•					1
5						•••	3
6						•	1
7						••	2
8				•			1
9			•	•			2
10		••	•		••	•	6
11		⁝⁝⁝	⁝⁝⁝	⁝⁝			15
12	⁝⁝			••	••	•••	11
13					•		1
14		•••			•	⁝⁝	8
15		•••		•			4
16	•••		•••				6
17						••	2
18		•					1
19		•	⁝⁝⁝⁝		••		10
20			••		•		3
21	••	•			••	⁝⁝⁝	1

資料Ⅲの3

C	1年	2年	3年	4年	5年	6年	人数
1		•					2
2	⁝⁝⁝⁝•		•••				12
3	•		•				2
4				••			2
5	⁝⁝⁝			••			8
6						•	1
7			•				1

A 15

（無）「しゃべっちゃだめ。」

六年

A 12

（三）「油がきれそうだ。」

A 14

（無）「しゃべっちゃだめ。」

となっている。

この二つのことから、次のように考えられよう。

一年生、二年生で、三人目、あるいは、せりふがおさえられなかった類のものが、三年生では、A 10とA 21にふりわけられ、四年生では、A 8～A 10へ移り、五・六年では、再び、A 10、A 21へそれぞれふりわけられていると言えよう。

四年生がA 21へ移っていかないということは、四年生の「無言の行」の事例を見ると、大へん、「申しひらき」が、巾広いということがわかる。

もう少し詳述すると、

二年生のA 12、A 14に属するような子どもたちは、三年生段階に入ると、「無言の行」がおさえられる者と、あいかわらず、おさえられず、さらに他の話もおさえられなくなってしまう子どもとがいると言えそうである。

ここで、A 21類の子どもたちのようすが、たいへん問題となってくるが、後述することとして、このA 12、A 13類の子どもたちにとって何が壁になっていたかを考えてみよう。

「無言の行」さえできていれば、A 10以上にあがる可能性がでてくるわけである。

その可能性は、先述したように「無言の行」の構成をつかめるという思考パターンを持つことにある。

この「無言の行」の核心は、三人目の坊主の発言であるが、それ以前に、最後に発言してしまうのは、一人目でも、二人目でも、話は、笑い話にならないのである。全員が、発言してしまうというのが大前提である。

しかも、最後の三人目の坊主が、「しゃべってないのは、おれだけだ。」

と発言させていなければならない。

三人目の坊主は、二人目の坊主までが、発言した時、心中、ひそかに、「しめた」と思ったことであろう。しかし、そのとたん「……。」と自分の口からも声がでてしまったのである。

子どもたちの事例中に多い、「行の最中は、しゃべってはいけません。」式の発言であると、正答の「おれだけだ。」という「だけ」とするおもしろさがなくなってしまう。読む方にとっては、「おれだけだ。」と読んだ時には、その裏に「お前も」という意識が働いていなければならないわけであるが、子どもたちの事例を見ると、その「お前も」と思ったことが素直に出てきてしまっている。ここに、子どもたちのたくまざる表現意欲・能力を見ないでもないが、ここでは、「お前も」は、ぜったいに、つつみかくすべきであったのである。

読み進めていった時、読む方にとっては、三人目の坊主同様、「お前も」と心中、思うわけであるが、この「お前も」は、二人称的なとらえであり、正答である「おれだけ」は、読み手にとって、三人目の坊主を、三人称的なとらえへ追い込んでいったものである。ここで、二人称・三人称のあやふやさと、せりふの事例とが奇妙に対照されてくるのである。三人目の坊主と指定した子どもの中にも、「しゃべってはだめ。」というせりふをはかせている子どもがいるが、これは、明らかに、坊主は、三人目をとらえたけれども、話に対して、自分自身を、三人称の場に置けなかったものと言えはしまいか。

特徴3

A20の類が、特に五年生に多いということであるが、これらの事例をひろってみると、

A20

五年生

「大小小」

「きせる、きせる」

(無)「三人目」「不明」

「へんだ」「やぶ」「まぬけ」

「よくわからないから。」

となっている。

この類に属する者が、六年生に見られないわけであるが、五年生でこの類に入る子どもたちは、六年生では、どこに行ったのであろうか。

A20は、「無言の行」が、誤答になっていることが、大きな特徴と言える。他の答は、○印、△印がついているにもかかわらず、「無言の行」だけが落ち込んでいる。

この落ち込みを克服している類を、六年生でさがすと、A16・A17がある。その克服のようすも、人称については誤答となっていて、せりふのみが、なんとか、

「もう、よそう。」

「そういうあなたもしゃべった。」

となっている。

先述したように、まだ、六年生のこの類に属するものは、坊主に、相手をせめるのみの発言しかとらせえていないのである。先述したように、ここは明確に、せりふの上でも、坊主を、三人称たらしめる必要があるわけであり、その意味では、この類に属する子どもは、その姿勢が、まだ、あやふやであると言える。

こう考えてくると、五年生で、A20に属する者の成長の延長を、六年生のA16・A17の類の子どもたちのあやふやさの中に見つけられるというような感じが持てるであろう。

また、A21について見ると

三年生

「大小小」

「きせる、きせる」

(無)「ろうそくが消えそうだ。」

「心のやさしいお医者さん」

「他の答がわからないから」

六年生

「大小小」

「きせる、きせる」

(無)「油がきれる」

「一応やってみる」

「聞いていなかった」

のように、A20に比して、さらに、「医者と患者」につまづきを見せているのである。

これらの事例において、「医者と患者」に関する返答を見ると、何をか言わんやの感を持つが、結局、時間における基準についての医者、患者のそれぞれの立場におけるずれが明確に押えられなかったのであろう。

これを克服している近くの類を見ると、A23がある。しかし、A23は、「きせる」が、できていない。

このあたりの類に属する子どもたちが、人数が多かったのは、「無言の行」「医者と患者」「きせる」にそれぞれつまづきを見せていることになるが、それにしても、四年生で、これに属する子どもたちがいないというのは、四年生の子どもたちのある特色を示していると言えるであろう。

六年生になると、A16、A17、A18とある程度のちらばりとはばを持ってくることと、照合してみると、「しらみ」が確実に押えられる子どもの中で三つのタイプが、つまづきという点か

らしてみつけられよう。

つまり、

1「無言の行」につまづく者

2「医者と患者」につまづく者

3「きせる」につまづく者

とになろう。

1については先述した通りであるがこれが、五年生に、特徴的に表われていることが、興味深い点である。

これの克服のきざしを、A22、A23に見つけられないこともないが、完全に克服するとなると、A9・A10のところまで飛び越えて行かなければならない。

A9・A10にしても、四年生の子どもの現われ方から見ると、スムーズに五年生に入ってもよさそうなものであるのに、五年生では、A20の類と、A9・A10の類とに大きく分かれてしまうのである。

これらの類の階梯の間にあるというべき、A16・A17の類が、六年生において表われている点については、学年の階梯からすれば、少々、疑問を持ちたくなるところである。なお、検討の要する所であろう。

2, については、「無言の行」に加えて「医者と患者」につまづいているわけである。

これら、二つを克服したものは、A14に属するが、特徴の2で述べたように、三年生は、一つの分岐点と考えられよう。（空白の説明）

また、五年生のA20で、「医者と患者」が、克服されているのに、六年生で、逆もどりがある点についても疑問を持ちたくなるところである。

3, については、A20・A21でのつまづきが、克服されているにもかかわらず、「きせる」につまづいている。この類が、四年生から表われている点は、興味深いところである。

つまり、四年生では、一名ではあるが、A8・A9・A10に入るために、最後まで、つまづきになっているのが「きせる」であると言えるのである。

以上、この特徴については、学校差も考えられようが、それにしても、疑問をいだきたくなるという点が多々ある。

特徴4

資料Ⅲの2のB11に、15名がいる点に注目してみよう。

この類は、「しらみ」が×で、「きせる」「無言の行」「医者と患者」が△で、正答への可能性を秘めている子どもたちである。

これら△を確実にしているのは、B1・B2であるが、これは、六年生にのみ表われている。

一つ上のB10の類を見ると、6名いる。この子どもたちは、B11に比して「医者と患者」から克服していっているのである。

いづれにしろ、このB11に属する子どもたちは、「しらみ」につまづきながらも、他のは、確実性を持ちつつあるという点が特徴的であろう。

「しらみ」の話は、主人とこぞうのやりとりを、土台としているが、「笑い」の構成の要素として、場面・人物の立場・声の大小の三つを持ってきている。

主人の側からすれば、お客に来たので、その場では、礼儀正しく、恥をかかないように、つとめたいという気持ちの副線があり、一方こぞうの方には主人に恥をかかせたくないので、親切のつもりでしらみの存在を主人に知らせるという気持ちの副線があり、「笑い」の構成は、二人の人物の気持ちの副線のからみあいにおいて、声の大小の、場への適・不適を中心にしている。

いわば、主人とこぞうとの間の感情の交流状況にかかわるところで、主人の側からすると、せっかく、きちんと礼儀正しくし、恥をかくまいとしているのにということと、こぞうの側からすると、せっかく親切にしらみらしきものがいることを教えてあげ、その上に、まちがっていたのをなおしてあげたのにというからまりが、声の大小の適・不適を通して察知できなければ、笑いは起ってこないのである。

このように考えてみると、この子たちは、「のに」欠如型とも言えよう。

この類のものが、五・六年に表われていないことは、興味深い点であるが先述したように、六年生では、B2・B3へ、あるいはA類の方へすいあげられているものと考えられよう。

B12が、11名いるが、これは、「しらみ」の他に、「医者と患者」につまづいているものである。この類が、四・五・六年で、表われている点は、特徴3で述べたことと付合しないだろうか。

また、B19が、三年生にかたまっているという点も、特徴3で述べたことと付合していくであろう。

さらに、B21が六年にかたまっている。この類は、A21と類似している。ただ、「しらみ」ができているかいないかという差はあるが、一つの特徴的な類と考えてよかろう。

特徴5

「笑い話」（小川君と大山君の話）についてであるが、この話は、先生の「言いなおす」と、小川君の「言いなおす」における、理屈のちがいを笑いの源としている。

先生は、おそらく、大山君の言葉を一字一句もらさず言いなおすことを、小川君に要求しているのであろう。その心理の裏には、ほんとうにわかったか、どうかを調べるなどという気持ちがあったかも知れぬが……。

一方、小川君の方にすれば、「言いなおす」ことは、一字一句もらさず言いなおすことはもちろんであり、大山君の意見と、同時に、同じことを言うことであると考えているわけである。いわば、言葉の一回性を押さえての意見をとらえなければ、この話は、笑い話とはならないのである。

こう考えてくると、小川君のことを小憎らしくもなるが、この話を選び出した所以は、実は、小憎らしくもなる小川君の理屈を、子どもたちが、どの程度、持っているかということを調べるねらいがあったのである。いわば、子どもが、自分自身の感情と言葉というものを、どのように身につけて、過しているかということである。

この話の笑いは、大人たちにとっては、笑うに笑えないような、きびしさも感じるが、そこで、意図的に、「笑い話」とことわったわけである。

さて、その結果であるが、

ほとんどの事例が、資料Ⅱで見る通り、

「聞いていなかった。」
「わからないから。」
「わすれた。」
「あたまが悪い。」
「言いまちがえる。」

などであった。

このお話のような状況は、子どもたちにとっては、お話でなく、現実そのものであったようである。そこに、言葉をさしはさみ、知恵を働かせる余裕すらないようである。

逆に見ると、子どもたちは、それだけ、現実の生活実感と言葉とを結びつけて考えているとも言えるが、この結果からすると、そこから、ひるがえって、言葉と自分との間に目を向けるなどという姿勢はないかの如くである。

子どもたちの、からくり＝虚構への姿勢が、言葉に持たせたはずの力とがだいぶ距離を持っていると言えよう。

この結果からだけでは、早計でもあろうが、言葉には、必らず、自分がつきまとい、自分がつきまとうからこそ自分の構造が、言葉にうつるなどということを、もう一度、子どもたちに話してやりたくもなる所以である。

四、まとめ

前記のように、いくつかの特徴をあげてきたが、これら特徴を通してみると、子どもたちの持っている、いくつかのグループが見つかるようである。

資料Ⅱの人数の多い所が、グループの核になりそうなので、仮に

Aグループ（A8・A9・A10）
A′ 〃 （A20）
A″ 〃 （A21）
B 〃 （B11）
B′ 〃 （B12）
B″ 〃 （B19）
B‴ 〃 （B21）

と名づけるとすると、（ ）内の類が核となって、他の類への移動（成長の盛衰）を行なっていると言える。そこでは、また、「無言の行」につまづくタイプ、「医者と患者」につまづくタイプ、「させる」につまづくタイプとがあろう。

A′～A″グループの中では、「無言の行」と「医者と患者」につまづいていくものの二つのタイプにわけられよう。

また、B～B‴グループまでは、「しらみ」がおさえられなくとも、「無言の行」「医者と患者」をおさえてゆくものと、「させる」を落としていくものと二つのタイプにわけられよう。

しかし、資料Ⅲの3、C2に一年生が9名いる。

このことは、人称の立場、自分の身の置きどころによって決まるということは先述したが、この一年生の場合は三人目というのは、ただ、単なる順列方式のようにとらえたのではなかろうか。せりふからしてみると、なにか、三人目というのが、三角の関係にある三人称ではなく、数列方式の、直線上の三人称というふうに思えてくるのである。

（文責　飯住）

相模原市清新小学校前
山本文房具店
電話 相模原72－2841番